

マンダレー外国語大学におけるアウト プット活動の有効性を探る授業の試み

—学習者の受身文に関する中間言語体系はどう変化したか—

ウィンウィンタン
2016年9月3日

研究背景

- 学習者は教師の文法項目の説明を聞くことが中心
- 習った文法項目を実際に使用する機会はない
- 学んだ文法項目を運用にまでつなげられない
- 受身文に関する様々な知識を得るが、運用にまで至らない
- 「動作者が人（有生物）の能動文が先にあり、それを書き換えた結果、受身文が作れる」
- 学習者が持っている知識をアウトプットする経験が少ない

授業計画の検討

- 卒業後、日本企業に就職する学習者が多い
- 企業では報告書を書くとき日本語を使っている
- 「動作主に言及する必要がない無生物主語の受身文」は報告書で使われることが多い
- 報告書を書くというアウトプットを通して無生物主語の受身文に関する知識を意識化させる

先行研究

Swain (1995)
「習得には理解可能なインプットだけでは不十分で、「書く」「話す」といったアウトプットも必要」

中常 (2003)
アウトプット後、モデルに触れることによって

- 「言えないことの気づき」
 - 「違いの気づき」
 - 「言語形式への気づき」
- が起りやすい

先行研究

村野井 (2006)

- 言い表したいことが、うまくできなかつたりすることで、自身の第二言語能力の「穴」に気づく→「**言えないことの気づき**」
- 自身の表現と、目標言語の正しい表現の比較によって、両者の「ギャップ」に気づく→「**違いの気づき**」
- 学習者自身によって、中間言語の仮説を形成したり、正しいかどうか検証したりする機会が生まれる→「**仮説検証プロセス**」
- 文法規則について意識的に考えるようになる→「**メタ言語的語り**」

研究課題

- 無生物主語の受身文に関する気づき、仮説検証のプロセスが確認できるどのような発話が観察できるか。
- 文法の意識化が確認できるメタ言語的語りが観察できるか。

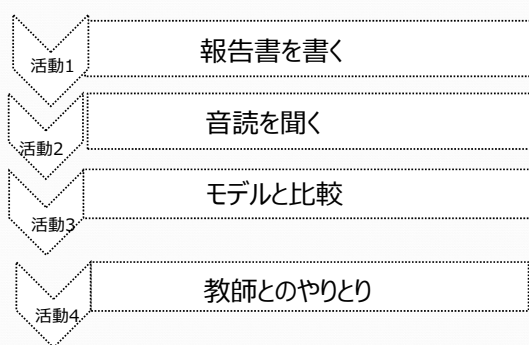
調査対象者

調査対象者 ⇒ マンダレー外国語大学
日本語科3年生30人(希望者)
年齢 ⇒ 18~20歳
日本語学習時間⇒ 850時間
日本語能力 ⇒ N3以上
主教材 ⇒ 『中級から学ぶ日本語』

授業実践のスケジュール

授業日	内容	授業日	内容
3月24日	説明会	4月6日	授業3回目
3月25日	プレテスト	4月7日	アンケート調査
3月31日	授業1回目	4月12日	ポストテスト
4月3日	授業2回目	4月20日	同僚教師と学習者に対するインタビュー

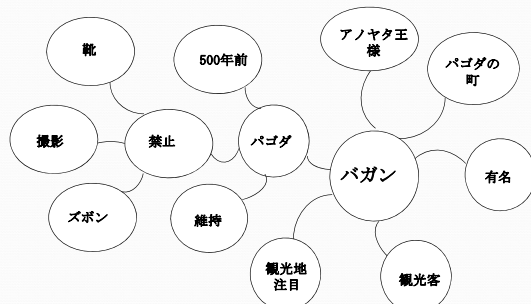
アウトプット活動の1回分の進め方



アウトプット活動の1回分の進め方 活動1の流れ

- (1) 1つのグループ(3人)、全て10グループを作る
- (2) グループで話しながら情報シートを見て、報告書を作成する

2回目の授業で配付した情報シート



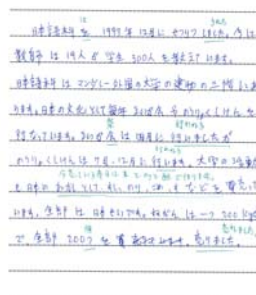
活動2の流れ

- (1) 3つのグループを指名し、報告書をゆっくり音読させる
- (2) 他のグループは音読を聞き、何が違うか相談する

活動3の流れ

- (1) 教師はレベルを意識して作った報告書のモデルを配る
- (2) グループで書いた報告書とモデルを比較する
- (3) 違うところに下線を引き、なぜ違ったかを相談する

学習者が書いた報告書とモデル



私たちは学校のイベントに参加しました。イベントは先週の土曜日の9時から11時まで行われました。イベントでは学部の紹介、文化の紹介、食べ物の紹介と販売をしました。学部の紹介は9時から9時半までで、文化の紹介は9時半から10時までで、食べ物紹介と販売は10時から11時まででした。学部の紹介では日本語科は1997年12月に設立されたこと、現在教師は19人で、学生は300人いることを紹介しました。文化紹介では映画祭は毎年4月に行われることとJLP Tは毎年7月と12月に行われることを紹介しました。食べ物紹介では寿司のことを紹介しました。寿司は日本の伝統的な食べ物で、今売っている寿司は米のりと酢で作りました。材料は全部日本から輸入されたものです。1つ200チャットで売りました。全部で200個売れました。とても楽しかったです。

活動4の流れ

- 教師からの問いかけを通し、無生物主語の受身文に関する知識を深める
- (1) 教師が色々な質問をして、学習者の文法知識の意識化を促す。
 - (2) 適切な答えが出たら肯定的なフィードバックを与える

トピック一覧

授業	トピック	情報シートの種類	報告書の中で使用されると思われる受身の動詞
1回目	参加したイベントについての報告書を書く	スケジュール表	行われる、設立される、輸入される、作られる、売られる
2回目	見学したバガンについて報告書を書く	思考マップの形式	建てられる、呼ばれる、禁止される、注目される
3回目	見学した架空の会社についての報告書を書く	思考マップの形式	設立される、構成される、行われる、輸入される、売られる

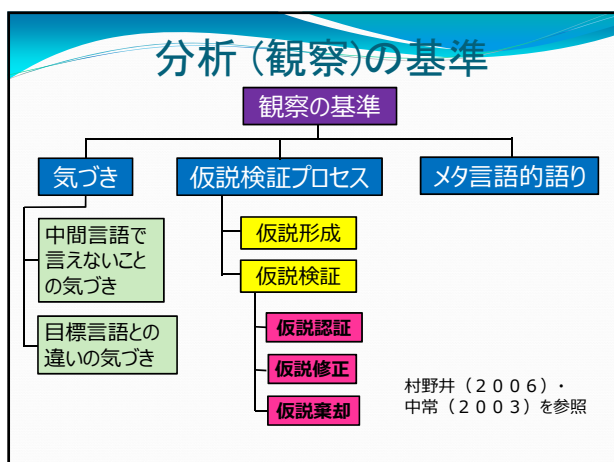
3回目の授業で配付した情報シート



アウトプット活動の有効性を探る

- 使用したデータ

学習者のアウトプット活動のやりとり（音声データ）の文字化資料



気づき

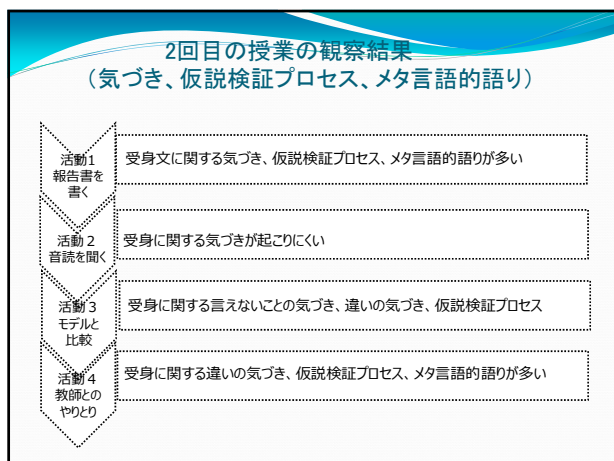
気づきの種類	意味
中間言語で言えないことの気づき	言い表したいことが、全く、またはうまくできなかったりする経験をすることで、自身の第二言語能力の「穴」に気づく
目標言語との違いの気づき	自身が産出した表現と、目標言語の正しい表現を比較することで、両者の「ギャップ」に気づく

仮説検証プロセス

仮説形成 (中間言語の仮説を形成する)	
仮説検証プロセス	仮説検証 (形成した仮説は正しいかどうか検証する)
	仮説認証 (肯定的なフィードバックがあり、仮説が正しいと判断する)
	仮説修正 (否定的なフィードバックがあり、仮説を修正する)
	仮説棄却 (仮説が間違っていることが分かり、それを捨ててしまう)

メタ言語的語り

文法規則について意識的に
考えるようになる



2回目の授業(活動1)

I-S3 : 違う、設立された。←S1に否定的フィードバック・S1は言えないことの気づき

I-S2 : そう、設立された。主語はバガンでしょう。←S2に肯定的フィードバック・メタ言語的語り

I-S1 : それじゃ、「バガンはアノヤタに設立された」。←言えないことの気づき・仮説修正

2回目の授業(活動2)

- B-S1 : 「禁止されている」という動詞を使った。
←肯定的フィードバック
- B-S2 : そう、同じ。
- B-S3 : 「注目されている」も一緒。←肯定的
フィードバック
- B-S1 : うん。←仮説認証

2回目の授業(活動3)

- E-S2 : モデルでは「よって」を使ったけど、私たちは「に」
を使った、違った。←違いの気づき・言えない
ことの気づき
- E-S1 : これ大丈夫じゃないですか。←仮説検証
- E-S2 : 分からない、でも「に」は「受身」と使える
でしょう。←仮説認証には至らない・メタ言
語的語り

2回目の授業(活動4)

- T : モデルと皆さんの文では何が違いますか。
- SS : 文の構成が違う。←違いの気づき
- T : 何が違う？
- SS : モデルでは最初は自分の動機を書き、最後は自
分の考察を書いた。←メタ言語的語り
- T : そうですね、報告書だからね。他に何が違う？←肯
定的フィードバック・SSは仮説認証

各活動で見られた傾向

		1回目	2回目	3回目
活動1	気づき	○	○	○
	仮説検証プロセス	×	○	○
	メタ言語的語り	×	○	○
活動2	気づき	△	×	×
	仮説検証プロセス	×	×	×
	メタ言語的語り	×	×	×
活動3	気づき	○	○	○
	仮説検証プロセス	○	○	◎
	メタ言語的語り	×	×	×
活動4	気づき	○	○	○
	仮説検証プロセス	○	◎	◎
	メタ言語的語り	○	◎	◎

(◎は多く見られた、○は見られた、△はあまり見られなかった、×は全く見られなかったの意味)

結果

言えないことの気づきは⇒活動1と活動3
違いの気づき ⇒活動1, 3, 4

仮説検証プロセス ⇒活動1, 3, 4

メタ言語的語り ⇒活動1, 4

- 活動4⇒メタ言語的が多く見られ、内容が具体的に正確に変わった
- 活動2⇒言えないことの気づきが起こりにかった

まとめ

- 活動1, 3, 4を通して言えないことや違いの気づきが生
じる。
- 仮説検証が行われ、中間言語体系が変化した
- 受身文に関するメタ言語的語りが増えた
- 内容も具体的に変わっていたことが確認できた
- 学習者の文法知識を意識化させるため1, 3, 4の
流れで実施すれば、有効性がある

今後の課題

- 無生物主語の受身文がどれぐらい運用できるようになったかを調べる。
- アウトプットを経験させる機会を積極的に導入し、学習者の運用能力を高める
- 社会に出た後すぐに日本語を使って活躍できる人材を育てていく

活動 1

<添付資料 1> 受身文に関するやりとり (Iグループ)

I - S2 : アノヤタに
I - S1 : 設立した。
I - S3 : 違う、設立された。←S1 に否定的フィードバック・S1 は言えないことの気づき
I - S2 : そう、設立された。主語はバガンでしょう。←S2 に肯定的フィードバック・メタ言語的語り
I - S1 : それじゃ、「バガンはアノヤタに設立された」。←言えないことの気づき・仮説修正
I - S3 : 「そのパゴダは 500 年前から建てられたものでした」と書きますか。←仮説検証
I - S1 : うん、パゴダ*が主語。←メタ言語的語り
I - S3 : それでは、「受身」の方が正しい、でしょう。←仮説認証
I - S1 : うん、「受身」で書いて。
I - S2 : 「パゴダは 500 年前から建てられたものでした」
*パゴダは日本語で寺院のこと。

活動 2

<添付資料 2> 受身文に関するやりとり (Bグループ)

B - S1 : 「禁止されている」という動詞を使った。←肯定的フィードバック
B - S2 : そう、同じ。
B - S3 : 「注目されている」も一緒。←肯定的フィードバック
B - S1 : うん。←仮説認証

活動 3

<添付資料 3> 受身文に関するやりとり (Eグループ)

E - S2 : モデルでは「よって」を使ったけど、私たちは「に」を使った、違った。←違いの気づき・言えないことの気づき
E - S1 : これ大丈夫じゃないですか。←仮説検証
E - S2 : 分からない、でも「に」は「受身」と使えるでしょう。←仮説認証には至らない・メタ言語的語り
E - S1 : そう、同じだと思う、直さないで。←仮説認証
E - S3 : これモデルでは「パゴダの町と呼ばれています」と「受身」を使った。←違いの気づき
E - S2 : 私たちは「パゴダの町として有名です」と書いた、違った。←違いの気づき
E - S1 : そう、意味が同じですけど、文型が違う。←メタ言語的語り
E - S3 : でも、ここを直して。「パゴダの町と呼ばれています」と。

活動 4

<添付資料 4> モデルと自身の報告書の違いと理由を考えるやりとり

T: モデルと皆さんの文では何が違いますか。

SS: 文の構成が違う。←**違いの気づき**

T: 何が違う？

SS: モデルでは最初は自分の動機を書き、最後は自分の考察を書いた。←**メタ言語的語り**

T: そうですね、報告書だからね。他に何が違う？←**肯定的フィードバック・SS は仮説検証**

SS: モデルでは「建てられた」という受身文を使ったが、私たちは「できた」という動詞を使った。←**違いの気づき**

T: モデルとはなぜ「建てられた」という受身を使ったと思いますか。

SS: バガンが主語だから。←**メタ言語的語り・仮説検証**

SS: 自分がやったことじゃない、自分が見る人の立場から表したから。←**メタ言語的語り・仮説検証**

SS: 第三者から表しているから。←**メタ言語的語り・仮説検証**

T: そうですね。←**肯定的フィードバック・SS は仮説検証**